

篠田達明 著 『戦国武将の死生観』

さきに「徳川将軍家十五代のカルテ」「歴代天皇のカルテ」など医学史に関係のある歴史もの好著を世に問われた篠田達明氏が、この度またまた一般読者にも関心の深い戦国時代の武将の死生観を巡って、興味ある図書を発刊された。

いまは戦国ブームといわれる。NHKの大河ドラマでも動乱期の戦国時代に材をとったものは、もっとも視聴率が高く、名ある武将が、志半ばに潔く死んでゆく場面などは繰り返し繰り返し映し出されて、天下の子女の涙を誘うのである。本書で取り上げられる武将は30名、といってもそのうち7名は夫に殉じた武将の妻であるが、彼らが死に臨んでどのような態度をとったか、どのような心境であったかが、著者独特の流麗な筆致で述べられる。

人生50年の時代、「死に際」は最大の関心事。戦国武将の死生観といえば、死ぬときは美しくありたい、名誉ある死をとげたい、臆病者とか卑怯者といわれたくないという心根で貫かれているといっってよい。この時期に渡来した宣教師フランシスコ・ザビエルもこれには感嘆して「(サムライは)甚だしく名誉を重んじるが、その弊はかえって彼らをしてほとんど名誉の奴隷たらしめた感がある」と本国に伝えている。

著者は、まず死生観は死に臨んだ時に発せられた言葉、とくに辞世にあらわれるとして、はじめに信長が生死をかけた戦いに出陣するとき、唄い舞ったとされる「敦盛」の一節「人間五十年、下天の内をくらぶれば夢幻の如くなり、ひとたび生をえて、滅せぬ者のあるべきか」をかかげる。次いで秀吉の辞世の句「つゆとをち つゆときへにしわがみかな なのは事も ゆめの又ゆめ」、謙信の「四十九年一睡夢 一期栄華一盃酒」、氏郷

の「限りあれば吹かねど花は散るものを 心みじかき春の山かぜ」、政宗の「馬上少年過ぐ 世平らかにして白髪多し 残軀天の赦すところ 楽しまざるをこれ如何せん」など。また変わったところでは梟雄といわれた斎藤道三の「捨ててだにこの世のほかはなき物を いづくかつるのすみかなりけん」などがどういう時に発せられたかを述べる。

たとえ辞世の句とか歌というのが伝わっていかなくとも、むしろ死に臨んで示した行動とか態度に本当の死生観があらわれるものである。言葉よりも行動や態度のなかで読み取るべきものとして、石田三成が刑場に引かれる途中体に悪いといっって干柿を食べるのを拒み、「大義を抱く武士は最後の瞬間まで命を惜しむもの」と言い放ったという話、細川ガラシャ夫人が自殺を禁ずるキリシタンの教義に従って他殺の形をとって自決した話や、小田原の北条家から嫁した僅か19歳の武田勝頼夫人が、夫に殉じて死ぬにあたり、自分の黒髪を切って使いに託し「武家の出身として潔く死んでいったと伝えてくれ」といった哀話などに、もっともよく死生観が表れているとして、著者の力が注がれている。

なお著者の筆は、晩年死に至る病の経過などから死因の分析考察にページを多く費やしている。むしろそれに力点が置かれているのではないかと思われる程である。しかし根拠となる文献の提示がやや疎かな印象を与えるのは残念。最後に戦国武将103人、女性11人計114人の病歴・寿命・死因の一覧表を付けているのは便利。

(杉浦 守邦)

[新潮社、〒162-8711 東京都新宿区矢来町71、
TEL.03(3266)5411、2007年12月20日、A5判、
240頁、1,200円+税]